

# 科学者・実践家モデルを志向する援助者の 研究と実践を促す行動分析的アプローチ

## Behavior Analytic Approach to Promote Research and Practice of Human-Service Practitioners for Scientist-Practitioner Model

○小幡 知史 (NPO 法人だいち)

Satoshi Obata for Specified non-profit Corporation Daichi

Key words: behavior analysis, human-service practitioner, scientist-practitioner model,

### 問題と目的

近年、エビデンスに基づく実践が、医療や看護のみならず、福祉の分野でも強調されつつある。実際、ソーシャルワークでもエビデンスに基づく実践の重要性が指摘されている (evidence-based social work; EBSW)。これら実践家に求められるエビデンスに基づく実践 (evidence-based practice; EBP) は、「臨床の専門的知識・技術と実践の中での意志決定におけるクライアントの価値と共に、最良のリサーチ・エビデンスを統合すること」と定義されている (McNeece & Thyer, 2004)。

一方で、科学的な知見に基づく実践を志向するモデルとして科学者・実践家モデル (scientist-practitioner model) がある。このモデルでは、臨床家は実証的な研究データを自身の応用実践に活かし、同時にその応用実践から得られた経験を自らの将来のリサーチクエスチョンに活かすことが求められている。このモデルの提唱者である Shakow (1941) は、科学者・実践家モデルに基づく臨床家の育成プログラムとして、大学院の1年次は心理学と他の応用科学における確固とした土台を確立し、2年次には治療法の原理と実践を学び、3年次にはスーパーバイズを受けながらのインターンシップ、4年次には学位論文の完成に当てるという4年間の PhD プログラムを提案している。しかし、すでに実践の現場で活動している援助者にとって、このような教育プログラムを受けることは現実的には難しいであろう。実際、福祉の現場で実践活動を行っている援助者からは実践と研究の両立の難しさも報告されている。

そこで本研究は、現場で実践活動を行う援助者が、EBPのために科学者・実践家モデルに従った実践と研究をどのようにしたら両立できるのか、行動分析的な視点に基づくアプローチを提案することを目的とする。

### 実践と研究を両立する行動分析的なアプローチ

科学者・実践家モデルにしたがって福祉の現場で活動している援助者は、科学的な知見に基づく実践をどのようにしたら行えるのだろうか。行動分析学の視点では、研究や実践は、援助者の行動であり、援助場面の環境との相互の機能的な関わりによって維持される。そうであ

れば、それらの行動が生じやすい環境を整備することで、それらの行動の生起を高めることができるかもしれない。

研究行動や実践行動が生起するには、どのような弁別刺激が必要だろう。実践行動が実践場面という文脈で生起することを考えると、実践のための研究行動の弁別刺激は、援助者が従事する実践行動に関連する文献となるだろう。従って、まずは実践行動に関連するテーマの学術雑誌を調べて重要な文献を読んで実践に関する最も新しい知識とスキルを習得することが必要である。しかし、援助者が文献を読むだけでは、研究や実践といった行動の維持は難しいかもしれない。次に必要なのは、勉強会や研修会を開催して同僚などに参加してもらうことである。このような会合でお互いに自分たちが読んだ文献の内容について議論し、新たな知見を同僚と共有すれば、研究行動や実践行動は社会的な強化を受けることが期待される。これは自分だけでなく同僚たちの研究志向を高め、研究や実践への意欲を高めることになるだろう。さらに、それらの知見を実践現場に試みても必要である。その成果を上記会合で発表することができる。それだけではない、実践での取り組みの成果を学会で発表することも勧められる。このように、自分が関わっている実践問題に関係する文献の読書会や研究会を開き、そこで学んだ知識とスキルを現場で実践し、その成果を研究会や学会で発表することで、援助者の研究や実践といった行動の生起頻度はさらに高まることが期待される。

援助者の研究や実践といった行動を促進するには、仕事現場の整備も重要である。研究や実践を促進する要因として、仕事現場における研究行動に対する理解や奨励、関心などを挙げることができる。職場や地域を巻き込んで科学的な知見を活かせる環境を構築していくことも重要だろう。

### 引用文献

McNeece, C. A., & Thyer, B. A. (2004). Evidence-based practice and social work, *Journal of Evidence-Based Social Work*, 1, (1), 7-25.